分散会１

司会者　　石原　善久
記録者　　森口　朝子
会場責任者　小笠原貴久

南山崎地区愛護班連合会

愛護班活動

南山崎地区愛護班では、参加率 80%のサマーキャンプ、スマイルボーリング、焼き芋、釣り大会などのイベントを行っている。メインイベントであるサマーキャンプでは、校庭でキャンプファイアーをしたりプールで泳いだりする活動をしている。釣りイベントでは、父親の協力も得て、大きなイベントとなっている。今後の予定としては、クリスマスイベントなども予定している。子どもの健全育成を図るために、保護者・学校・地域の方々が一体となってイベントを盛り上げている。南山崎小学校の生徒の保護者には移住者も多く、初めは地域に馴染めない人もいる。愛護班活動を通して子どもを思う共通認識が生まれ、子ども同士の輪を広げるだけでなく、地域に馴染めなかった保護者も地域・学校との間でコミュニケーションが生まれ、地区全体の輪が広がる場になっている。今後も子どもの健全育成を図る中で、保護者、子ども、地域、学校をつなぐ活動をしていく。

田頭　孝志　氏

森からつづく道

伝えていこう生き物の恵みとえひめの暮らし

愛媛県は豊かな自然(生物多様性)に恵まれている。ところが最近、自然環境が変化し、生き物たちが今までにないスピードで減少しつつある。また、自然体験が乏しいことから、身近な自然の良さを自覚して保全しようとする気持ちが若い世代に芽生えない状況も懸念される。このため『ＮＰＯ森からつづく道』は自分たちが環境調査・研究を行うことで情報提供し、県内の方々に自然を五感で触れる体験の場を提供することにより、自然に興味を持ち、保全にかかわる人を増やし、自然と人の暮らしとの豊かなつながりを次世代に継承していくことを目的に 2013 年 4 月に発足した NPO である。環境調査をした結果は、レッドデータブックに載っている。子どもたちに自然体験をさせるため、専門の先生を呼んで活動もしている。今治城で、自然の水族館を実施したり、生き物パラダイス大三島保全作戦を実施したりして、四国中で様々な活動を実施している。森の幼稚園を実施している海外を参考にして、今治でも「森育」を実施するなど、様々な場所で生命多様性の保全を目的として活動している。

小澤　潤　氏

なみの高原やすらぎ交流館

やすらぎ交流館が行った「地震のケア活動」から「居場所づくり」への実践報告

平成 28 年の熊本地震本震発生直後から、やすらぎ交流館は、地域の自主避難所として地域住民の受入、復興支援企業の受入を行った他、NPO 今治センター等、地域内外の NPO 個人団体の支援を受け、今まで実施してきた体験交流事業の経験を活かし、余震に怯える子どもと母親の心のケア活動「遊びと癒し活動～阿蘇の復興は子どもとお母さんの心から～」を開始した。「遊びと癒し」活動は、九州・四国を含む全国の有志から支えていただき、被災した波野地区の子ども・母親の大きな支えとなった。また、これらの活動が、さらなる縁を広げ、現在では、子どもと母親の居場所づくりとなる「森のあそび場・森のようちえん活動」につながっている。個人の縁で世界を広げることができる。子どものためにできる人ができることをする。予算のことなど課題があるが、子どもたちだけでなくいろいろな方にとってよりよい場を提供する。

望月　克哉　氏

南山崎地区愛護班連合会の実践について

【表記について】
質問「Q」 回答「A」 感想「感」 司会者の発言「司」

Q　子どもたちが自分でしたいことを決める活動をしているが、逃走中がよく出てくる。場所はどこでするのか。

A　学校の中で実施する。企画段階であるが、学校の協力がないと難しい。校内放送なども使いながら、校内で実施する。ハンターは、保護者の父親がする。

感　サマーキャンプに参加した大学生が、大人も子どもも楽しんでいたと感想を言っていた。保護者の思いを知るよい機会になっていたので、よい実習になっていた。

Q　地区の中で何班あるのか。加入率はどのくらいか。組織はどのようになっているのか。愛護班は組織に組み込まれているのか。役員さんについてはどうなっているのか。

A　伊予市の中にそれぞれの地区がある。連合会なのだが愛護班は１つしかない。公民館も１つである。100名の児童の加入率は 100%であるが、子どもの育成費として年間 200 円を払っているかいないかで問題も出てきている。社会教育事業の一環であるが、組織としては別である。本部役員は、小学校に在籍している保護者や地区でお手伝いをしてくれる人もいる。全部で 30 人くらいはいる。祭りなどは別である。

Q　小学校が活動の舞台にはなっているが、大学生や高校生も関わっている。愛護班のような活動で中学生が関わっている活動はあるのか。

A　愛護班やＰＴＡ活動があるが、子どもを対象としているのは、２つぐらいである。他の地域には、おやじの会などもあるがまだない。子どもが少ないので既存の組織を広めていく活動をしている。

Q　どのような時に楽しさを感じるか。

A　自分で企画した釣りイベントなど、みんなで一つのものを作り上げていくイベントが好きである。サマーキャンプでは、今まで交流のない保護者もたくさん来てくださった。20 年続いている活動でもあり、ずっと続けていきたい。

Q　積極的にされているから、どうやって保護者を巻き込んでいくか教えてもらいたい。コミュニティースクールなどをしているが、何がいるのか。熱意やオーラ、そして地域の素地などの相乗効果があるのではないか。子どもがいなくても成立するためにはどうすればよいか。

A　お金を払っているのになかなか巻き込めていない。200 円の支払いの文句は言われないが、今後の課題である。子どもがいないけれど、子どもと関わりたい大人も来てくれるので、そのようなイベントを今後も企画したい。年に１度はしているが、愛護班発進でも今後していきたい。

Q　楽しい企画を考える上で大切なことは何か。どのように募集をしているか。

A　例年行っているものは参加するのが当たり前である。新しい企画は、子どもと一緒にしたら楽しいことを考えている。地域の子どもたちから、意見を聞いてヒントにしている。親がどう楽しむかも考える。面倒だと保護者の方が思わないような楽しいイベントを心掛けている。

感　少子化の影響で地元の活動がどんどん無くなっていくのはさみしい。全校児童が 100 名でも、一生懸命されていて感心している。

司　今日のことを参考にして地域に生かしてもらえたらと思う。

【全体協議の様子】

森からつづく道の実践について

Q　西条自然学校など他の施設との関わりはどうなっているのか。

A　いろいろな施設との関わりがあり、いろいろなところとつながっている。もし何かあれば愛媛県中どこでも行く。子どもたちの興味を引くことができるような活動をしている。

Q　漁獲量の減少はなぜか。

A　熱帯魚が瀬戸内海で出てきている。磯焼けがひどいため、魚が育たなくなってきている。原因が不明だが、あさりがとれないのはひどい。現状を知る活動をしている。

Q　今治城の掘りの生態系が不思議なのはなぜか。

A　真水がわき出ているから、淡水魚もすめるし、塩水にも強い。塩分濃度なども大学に協力して調べている。高校生が調べてもおもしろい。亀などもいて、いつも入れない場所も入ることができる。ウミウシなどもとてもきれい。声を掛けてもらえれば見られる。

Q　自然観察会をしたいが、どこまでしてもらえるのか分からず踏み出せないでいる。アースランドに行ってみたが、すごく楽しく今後も計画中である。指導員さんをどのように探せばよいか。

A　愛媛県は補助金が充実しているので、呼んでもらえるだけで謝礼などはいらない。いつでも声を掛けてもらって輪を広げていきたい。都市環境学習センターもあるから、そこでもできるが、こちらに言ってもらっても構わない。中間支援をしていく団体なので、行政とバランスを取りながら補助という形で行っている。今治城は、9 月～10 月がよい。

Q　実際に行かれた団体は、交通費用はどのようにして行ったのか。

A　遠足として行った。運営費から出している。興味をもって見つけた物を専門家に説明してもらえるとよい。

Q　環境保全などの団体なのに町作りが最優先なのはなぜか。

A　他に無いものを見せるのが今必要だから。いろいろなところと連携をして、町作りをしていくほうがいろいろな人と関われるのでそうしている。

Q　地域住民、企業へはどのようにしてお願いに行ったのか。

A　企業は頭を下げてお願いに行ったが、門前払いをされた。県に行ったら企業とつながることができた。看板などの物でお金を出してもらうようになった。住民との連携は、自治会長や公民館で連携を図った。

なみの高原やすらぎ交流館の実践について

Q　ターゲットはどこか。

A　大分や四国をターゲットにしていて、土日以外の利用者に来てもらうためにいろいろな対策を考えている。

Q　個々の災害に備えて対応しているのか。

A　自分が分かっていることだけをしている。水害の小さい河川は備えていたが、想定外の所までくると大騒動になる。今までになかったことが起こっている。台風とかの災害は気を付けることができるが、地震はどうしようもないので、寝室に物は置かないことなどできることを普段からするように伝えている。経験値は増しているが、熊本も大丈夫なわけではない。

Q　ＢＣＰについて。

A　社員が死なず、怪我をしないようにすること。自主防災マニュアルもいざというときのために、聞いておいた方がよい。落ち着いて学んだことを実行できたことがよかった。リストを元に優先順位をつけて行う。子ども向けの絵本でもよいので、いざというときのために見ておくのも大切である。

Q　モチベーションを高めるのはどうしているのか。

A　キャンプや交流が好きだからそういう場を作りたいのでやっているが、難しさがあるので模索している。

Q　ボランティアの波が去った後のフォローなどがあれば教えてもらいたい。

A　地域の問題であると思う。過疎地に道ができたら人が減るとは言われているのに、道ができたらいいという話がでている。そのようなときに、学生などが自分の目で見て、地域が自発的に何かをするところまでいければよいと思う。熊本地震のときは、携帯でメールなどは通じたからいいが、南海地震のときは、難しいと言われている。何かあったときに避難する場所を決めておくことや公衆電話の使い方を教えておくなど、できることからしておくことで生き残る率が上がる。役割分担が必要である。今回のテーマであるようにつながっておくとよい。

Q　今、波野の方にとってどのような交流館を目指されているか。

A　地震のときに頼りになる場、相談したり場所を利用したりすることができる場になりたい。

感　実際に行ったが、頼りになる場所だけでなく、地元の方が、「自分たちがしてあげないと」という気持ちをもって活動している場所となっている。

分散会２

司会者　　仲村　康子
記録者　　上田　　謙
会場責任者　柳瀬　　剛

双海町翠地区ほたる保存会

「双海町翠地区ほたる保存会」は、翠地区協力隊サポート環境教育事業の一環として、「ほたる祭り」の運営を行っている。また、地域のシンボルである翠小学校と連携し、地域の魅力発掘と整理を推進し、地域を盛り上げる活動も行っている。翠小学校５・６年生の総合的な学習の時間「翠おこし協力隊」では、ほたる保存会と連携し、双海地区がほたるでいっぱいになるよう、えさになるためのカワニナの養殖やほたるマップの作成、環境保護の啓発等の活動を実践してきた。さらに、その成果をほたる祭りや学習発表会で地域に発信することで、地域と学校、多世代が一体となり地域全体で、ふるさとのすばらしさを共有することができた。

本田　正彦　氏

東芝ライテック株式会社今治事業所

東芝ライテック株式会社今治事業所は、東芝グループ企業として、周辺地域の自然保護、絶滅危惧種の保護を中心に環境保全の面から地域貢献を行っている。2013 年度より「ウンラン（絶滅危惧ＩＡ類）」「デンジソウ」「トチカガミ」を保護するために、今治営業所内において生育を行ってきた。地元の小学校、愛媛県、自治会、ＮＰＯ森からつづく道、専門家等と連携をして、事業所内で生育したウンランを地域の織田々浜に移植し、環境保全に取り組んできた。小学生による移植活動や織田々浜マップ作りの活動を通して、地域を愛する心情も芽生え始めている。今後は、環境を保全するだけではなく、これらの取組を次世代に継承することを視野に入れながら活動していきたい。

越智　秀信　氏

南国市食生活改善推進協議会

高知県南国市では、「食育」「地産地消」「健康づくり」の取組を一本化した「南国市版食育推進計画」を策定し、様々な活動を通して地域の食育推進を図ってきた。とくに研修会、講習会を充実させることで多くの方々に啓発をしている。地域の学校や団体を対象に「災害時に役立つ料理ワザ研修」「エコレシピクッキング研修」なども開催し、南海地震対策の一環としての活動も取り入れている。また、環境問題から「食のあり方」を考える取組も重要と考え、小学校での出前授業やイベントでの啓発活動を通して、多方面から食育の推進を図っている。

門脇　由紀子　氏

分散会内容（質疑応答）

双海町翠地区ほたる保存会

Ｑ１　実践していく上での課題について

→　多くの団体、世代が関係しているので、活動方針や日程等をうまく調整をしていかなければならない。それらをつないでいくコーディネーターがとても重要になってくる。また、双海町の「魅力＝翠力」をどう発信していけばよいかが大きなテーマであったが、地元翠小学校との連携により、選択肢が広がった。

Ｑ２　学校との連携について

→　先生方の協力もあり、総合的な学習の時間での実施は、今年で３年目になる。清掃活動、水質調査、カワニナの調査など、今でも活動が続いていることがありがたい。

Ｑ３　今後の取組について

→　どの地域も抱えている少子高齢者問題だが、この活動が始まったのは、双海の地域や人々のよさがあるからである。人がいなくなったから終わりではなく、その後も継続していけるものを模索する必要がある。「つなぐ人＝つむぐ人」であるコーディネーターの存在がとても重要になってくるのではないか。今の子どもたちが地域に少しでも帰ってくる魅力が必要なので、今こそ
「ふるさと学」というジャンルが大切になってくると考える。

東芝ライテック株式会社今治営業所

Ｑ１　活動していく上での課題

→　企業なので、費用対効果をどのように調整していくかが重要。学校との連携形態のすばらしさ、企業ならではの視点等を、社員を含めて啓発していくことで理解を得ることができた。
学校との連携の中では、野外活動もあるので、開催時期の調整や代替案等を綿密に行った。また、ウンランが絶滅危惧種に指定された背景や原因、生育方法等については行政や専門家などと相談しながら行うことで、より効果的な取組となった。

Ｑ２　企業として参加した成果

→　企業としての利益は少ないものの、環境省主催の「自然環境局長賞」を受賞したことで、企業と地域のつながりができたことは大きい。行政とは違い、立案、予算等のスピードは企業ならではフットワークの軽さがある。経営陣にも理解が深まり、今後も継続していく予定である。企業、行政、学校との連携により、よりよい取組となった。他者を巻き込むことで、より効果的な活動になることが分かった。

Ｑ３　今後の活動について

→　さまざまな活動を持続していくことで、次への世代へ継承できると考えている。他企業との連携も模索している。「持続可能な社会の実現」には、まさに、地域、学校、社会、企業等の連携が不可欠を考えている。

南国市食生活改善推進協議会

Ｑ１　組織の主な活動について

→　学校と連携し、家庭科における授業補助、キャリア教育の協力、地域での食育イベント、生活習慣病予防のための取組、防災に関する研修会など多岐にわたっている。

Ｑ２　行政との連携について

→　もともと給食普及率が低く課題となっていた。その現状を鑑み、南国市は日本初の「食育のまちづくり宣言」を行った。そのため、行政に予算を含めて、全面的にバックアップしていただいている。県立大学、国際交流協会との連携も行っている。

Ｑ３　今後の活動について

→　南海トラフ地震をはじめ、防災教育の緊急性を感じている。行政の取り組むスピードはどうしても遅いが、南国市では防災士が 100 名近くおり、すべて県が補助している。防災士連絡会を起ち上げ、市と連携しながら、様々な研修会、講習会を開催している。今後、ＡＥＤの設置場所、組織図、防災倉庫、避難所での食事など、様々な点で準備が必要となってくる。

最後に

地域のつながりが希薄になっている現代、学校、地域、行政、ＮＰＯ団体、地元有志、サークルなどが互いに連携することにより、様々な社会問題を解決していく糸口が見つかるのではないか。それぞれの立場でアイデアを出すことで、新たな取組や方向性が見えてくるのではないかと感じた。今こそ「社会教育の底力」を発揮する時期ではないかと思う。

分散会３

司会者　　小田　眞
記録者　　二宮　啓
会場責任者　山口　定伸

愛媛大学法文学部　佐藤亮子ゼミ

秋月　碧氏・大内　麻衣氏
坂本　紗弥氏・重松　誠氏

愛媛大学法文学部佐藤ゼミは JA えひめ中央太陽市と共同で、農家と消費者が直接出会う場を創出するために、多面販売形式のファーマーズマーケットの企画・運営を行っています。

生産者が消費者に直接販売を行うことによって、生産者の思いや背景を知ることができ、消費者にとってより「安心・安全」を求めることができます。

学生は事前に出店農家を訪問して農作業を手伝い、農家の想いを伝えるチラシを作成します。そして、ファーマーズマーケット当日は、運営、販売サポート等を行うとともに、バラエティー豊かなイベントを実施しています。

波方地域コミュニティ活動協議会

矢野　俊雄氏

平成 28 年、市の広域合併による行財政改革で多くの公共施設がなくなっていく中、児童館を残して欲しいとの地域住民の願いが実を結び、公共施設の民間による委託運営が現実、「なみっこ交流館」が誕生しました。

「なみっこ交流館」では、これまでの児童館としての子育て支援や児童の健全育成の事業は継続しながら、喫茶コーナーや地域住民が育てた野菜の販売コーナーを設けたり、老人クラブと一緒に文化活動や農業体験をしたりするなど、地域住民の交流・居場所づくりの拠点としての機能も併せることで、様々な年齢層の地域住民の中で子育てをしていく環境づくりを目指しています。

子どもボランティアサークル　どらえもん

池田　和則氏

人口減少と高齢化が急速に進む「縮む社会」。中土佐町においても地域の存続すら危ぶまれる社会環境の中で健全な子どもを育てることは容易ではありません。10 年前、危機感を持った地域のおじいさん・おばあちゃんが「この指止まれ。地域の子どもたちのために、何かできないか。」そんな思いで、「子どもボランティアサークル　どらえもん」が誕生しました。手弁当で活動を続けています。平均年齢 75 歳　園外散歩・自然体験・昔遊び…今では、保育活動や小中学校の地域学習にはなくてはならない存在になっています。

社会教育、生涯学習、地域教育…難しく考えると大変だけど、地域をフィールドに地域の人々が主体となって子育て支援・教育を行う環境を整えながら、子どもたちに社会性と世代の継承を自覚させる取り組みが今求められています。「どらえもん」の実践から持続可能な地域ぐるみでの子ども支援、地域コミュニティの再生を共に考える機会になればと思います。

質疑応答、感想

愛媛大学法文学部　佐藤亮子ゼミ

Q１　この体験を通して勉強になったことは？

→　直接、農家さんに会うことで値段へのこだわりなどを知ることができた。

→　担当している農家さんの品物に興味を持った。

→　関わったことのない農家さんと関われたことが良かった。

→　同じものを作っていてもこだわりが異なっている。畑の手入れも心がこもっていることが知れた。

Q2　みかん農家以外には行っていないのか？行って感じることは？

→　シクラメン、野菜（その時期）を育てている方のところに行く。毎年同じものを作っているが、出来具合や天災により同じものを作り続けることは大変なことである。

農家さんからゼミに売り上げの５％を出店手数料としていただいている。

Q3　今治市で農家をしている。消費者への呼びかけはしていますか？

→　買った商品に作成したチラシを入れている。読んでいただけたら、安心・安全について伝わると思います。

Q4　年に４回の参加はどのような感じで行っているのか？

→　年に４回学生と JA との共催で行っている。

Q5　学生が運営し主体的に行っていると思うので、課題が出てから次年度とつながると思う。今までの流れを教えてもらいたい。

→　今後も継続していきたい。生産者がマンネリ化していて、生産者自身に工夫してもらいたい。生産者が自作キットを作って農業を体験できる場を作っていただいた。今後は、折り込みチラシなどを工夫して来場者を増やしていきたい。他のイベントと重なってしまい、来場者が少なくなる場合もあった。

Q6　学生のお手伝い、学生の募集の仕方は？

→　愛媛大学からのメールで宣伝や授業の最初にボランティアの説明をしている。

Q7　学生ボランティアのリピーターは？

→　リピーターはいる。その中には、生産者でアルバイトした方もいる。

Q8　農家さんは、直接販売だけでは商売にならない。対面販売はいいと思います。生業を視点に入れた取り組みを大事にしていただきたい。持続可能な運営をしていただきたい。

Q9　折り込みチラシの効果は？

→　JA はあらたま地区の範囲に配布して、今後調査していきます。

Q10 おひさま市のお客さんは、どのくらい来場されますか？

→１万人、それ以上来場されることもあった。

Q11　農家の体験はされているのか？

→　生産者の方に一緒に作業させていただいたこともある。チラシには訪問の感想を書いている。こだわりも書いている。

Q12　生産者のところへの体験は、ゼミ生だけ？

→　基本的には、ゼミ生だけであったが他の生徒も参加したこともあった。

Q13　身近な人や友だちに話をしていますか？

→　ご飯を食べたときなどに話をして、興味を持ってくれてボランティアに来てくれることもあった。

Q14　リピーター率で若者が低い、高めるために努力していることはありますか？

→　生産者が商品の入れ物を可愛いものに、花の鉢を可愛くして、レイアウトを工夫された

波方地域コミュニティ活動協議会

Q１　活動に関わっている子どもの数は？

→　中学 400 名規模、小学 300 名を切る。私たちには大学生の参加がない。今後は地域の体験活動に参加させてあげたい

Q2　近くの大学や高校の距離は？

→　短期大学が近くにある。たまに体験に参加してくれる短大生はいる。

Q3　ボランティア　40・50 代　参加率は？
→４，５名　活動の中心は元気な老人の方です。
Q4　ラオスの小学校設立について教えてください。
→　寄付をして企業に順番に建てていただいている。ラオスは最貧国で、これからの国である。
→　学校教育がよくなれば、次に、第一次産業を支援すると生活が豊かになっていく。
Q5　専属職員は？
→　以前からの２名であるが、意識改革をしたい。
Q6　広報の仕方は？児童クラブはどのように運営をしているのか？
→　今治市の広報にチラシを持っていく。小・中学校にチラシを持って行っている。ブログ発信もしているが、見てもらいにくい。
→　児童クラブには保育士免許を持っている方がいる。
Q7　情報提供として、東雲大学や愛媛大学で社会体験や企画にも携わってくれるようになってきている。
Q8　お祭りやイベントは？
→　年３回なみっ子タウン、出店店舗 20 店舗くらいある。うどんやたこ焼きを作ってくれる方もいる。
Q9　4000 人少ないと言われたが、具体的にどれくらいの人数を期待されているのか？
→　数字だけでない。館に来て活動してほしい。中身より質が問われてきている。不登校や引きこもりの解決策になればいいと思う。
Q10　社会福祉協議会との取り組みは？
→　活動を企画してくれたり、お金を出してもらって活動したりしている。

子どもボランティアサークル　どらえもん

Q１　農作物のメインは何ですか？
→　メインは、みょうが。みょうが 5 反、いちご３反、インゲン６反、しょうが１丁、水稲６丁
Q2　職歴は？
→　50 歳まで教員をしていた。25 年を区切りに生活している。
Q3　25 年で区切るのは、なぜ？
→　20 歳くらいから、陶芸と出会って陶芸家になりたかった。教師になりたくて教師になったわけでもなかった。自分のやりたかったことをしてきた結果である。
Q4　地域の、子どもの数は？
→　人口７千人前後、保育所５，６０名、小２００名、中３００名程度です。
Q5　「どらえもん」サークルに関わるようになったきっかけは？
→　誘われて「できることをできることから」無理をしない。行政に頼らない。自分たちでできる活動をしている。他のサークル「マサイ族」にも属している。
Q6　人材確保のつながりは？
→　人ありきです。つなぐ。人づくり、人を育てている。見つけて、育てていくコーディネートが大切である。
Q7　メンバーに若い人を取り入れないのか？
→　関りが難しく、どのように巻き込むのか。一つの方向に、みんなで向かってことが難しい。
Q8　交流の深め方は？
→　つながることが重要な食事会を開き、人と人をつなぎ、自分から深める。すると、他の面も充実してきてプライベートの充実にもつながっていった。

分散会４

司会者　濱崎　俊広
記録者　西村　隆信
会場責任者　本田　精志

余土地区町づくり協議会

今田　紘一　氏

余土地区町づくり協議会では、各種団体と連携をして、「みんなで作る住みよい町」をモットーに様々な活動に取り組んでいる。協議会は、総務企画、広報広聴、保健福祉安全、環境整備、教育文化、５つの組織から成っており、総務企画は活動の計画等を、広報広聴委員会では、余土検定の開催等を、保健福祉安全員会では、防災研修会等を、環境整備委員会では、花いっぱい運動等を、教育文化委員会では、余土検定に向けた講習会等を行っている。また、余土地区の問題として、様々な行事はあるが、若者の参加は少なく、地域とのつながりがだんだんと希薄になってきていることが挙げられていた。それを改善していくために「余土子ども夏フェス」を開催し、幼児からお年寄りまでがいつまでも関わり合える地域にしようとしている。

すみの見守り･SOS ネットワーク協議会

曽我部　美由紀　氏

すみの見守り･SOS ネットワーク協議会は、「認知症高齢者の方およびそのご家族が安心して住める角野校区に」を目的に「広報活動」「支援活動」「捜索活動」の３つの活動を行っている。新居浜市は、ここ数年において、人口減少が続いているが、高齢者の人口は増加している。
そのような中、認知症徘徊者が行方不明になり、その後遺体で発見されるという事件が起こった。それらを防ぐことを目的にして協議会が設立された。市民に認知症が病気であることの理解を深める活動として、新聞を発行や劇団による寸劇公演を行ったり、認知症の家族を支援するために、ふれ合いサロンを開いたりしている。

福岡市立壱岐小学校おやじの会　壱岐なおやじ

井野　康平　氏

新聞を賑わすほど荒れていた学校。そんな中、「俺たちにも何かできる」と、８６人の壱岐なおやじが立ち上がり、見守りなどを行う団体として、おやじの会が設立された。現在、その活動もあり、現在の学校は、大変落ち着いている。設立 10 周年を迎えた壱岐小おやじの会は、学校、地域と連携をして、子どもの見守り活動の他、段ボールハウスキャンプや壱岐カレー選手権などを行っている。災害時のキャンプを兼ねて、段ボールで家つくり、実際に泊まったり、夜の学校体験を行ったり、子供達と一緒に自分たちも楽しみながらも行うことをモットーにして精力的に活動を行っている。

質疑応答･意見感想

〈余土地区町づくり協議会〉

Q　余土子ども夏フェスで紙飛行機を作ったと言われていたが、私たちも紙飛行機大会を行ったことがある。その時、紙飛行機の折り方を知らない子がいたが、余土地区町づくり協議会ではどうだったか。

A　折り方を知らない子もいました。私たちもいろいろな折り方を調べてみて、その中の一つの折り方を教えて、その折り方限定で大会を行った。

〈すみの見守り・SOS ネットワーク協議会〉

Q　曽我部さんの髪が抜けたのは介護によるストレスか？

A　色々とひと月ほど悩んでいたので、そうだと思う。２年くらいしたら生えた。生えたときは癖毛になっていた。

Q　この協議会のサポーターの方をどうやって増やしているのか

A　文書の配布等で協力を募っている。お金はないので、カメラなどの設置はできないが、一人一人がカメラがわりになって、角野が住みよい町になってほしいと思っている。

○　私の母が認知症になったが、その当時、あずける所もない。隠すつもりもなかったが、とりあえず、隠すようになっていた。寝たきりになってから、自由時間ができて、悪いけれども少し安堵した。仕事も辞めざるを得なかった。

○　仕事でアパートの掃除に行ったときに、戸を開かないようにしていた方がいた。認知症の親がいて、そうでもしなくては、仕事がある人は、どうしようもない。

○　認知症を煩うと、暴れたり、会話が成立しない事があったり、それを見る家族は本当に大変である。暴れると、施設でも見てくれない。精神科等の病院で見てくれるが、薬の投与で寝たきりのようなことになる。暴れるのは、精神の状態が関係しているので、寄り添って生きることが大切だと感じた。

〈福岡市立壱岐小学校おやじの会　壱岐なおやじ〉

Q　壱岐なおやじの会が学校でいろんなことが行っているが、どう感じたのか。

A　あこがれる。先生達といっしょにどんどん様々なことをしたい。

Q　おやじの会についてどう思うか。

A　呉市には、おやじの会がなかったので、新鮮だった。

Q　女性から見て、おやじの会についてはどう思うか。

A　女性は参加しにくいように思う。

○　おやじの会は、PTA の枠ではできない活動ができる。運動会の場所取りだとかで出るクレームをおやじの会が学校と地域をつなぐ会にもなる。先生と地域とをつなぐ役割をも果たしている。様々な活動を行っているので、おやじの会が見直されているように思う。

○　先生と家庭とが役割分担をし、いっしょに育てることが必要である。だからこそ、いっしょに飲んで、話合って協力しやすい環境をつくる。だか

らこそ、子どもたちが過ごしやすい環境をいっしょに作れる。先生がいないときも、おやじはいる。

〈参加者からの意見・感想〉

○　えひめ犬猫会という団体で、拾った犬猫を会員の家で育てている。毎月、譲渡会を行い、保護主とほしい人がつながり、譲渡できるかどうかを確認し、譲渡している。一度捨てられた子達なので、つらい思いをしないために、ひと月様子見タイムがあり、合わなければ返すようにしている。譲渡は無料でやっていたが、去勢、不妊手術のための費用がかかるため、それは頂くようにしている。また、最近では、被災時の対応を広めている。避難するときは、ペットを連れて行く、連れて行き方等を広めている。

○　佐那人と言い、NPO でバンド活動を行っている。佐那河内村がどんどん過疎化していっているが、人とのつながりとは何だろうというメッセージを歌にして伝えている。以前、人権コンサートを行ったが、大人が楽しんでいると子どもたちが楽しんでいた。佐那河内村は、自然がいっぱいで、川で泳ぐことができる。

○　壱岐のおやじの会がとてもおもしろかった。年を取っておやじになったときに、熱い思いをもって取り組んでいきたい。

○　私の母親が一人暮らしをしている。認知症の方への取り組みをもっと全国的に広めていってほしいと思う。おやじの会の話を聞いて、現在、PTA 役員を選ぶのに、なかなか難しい。教職員といっしょに役員を決める。いっしょに様々な活動を行える人材がいる学校は大変すばらしい。

○　おやじの会がとてもすばらしい。なによりも楽しそう。定年後、楽しい活動を作りたい。

○　福岡市内では、６６％の学校でおやじの会があり、どんどん増えていっている。おやじにできることがあるはずなので、積極的に活動し、子どもをみんなで育てていきたい。

○　いろいろな人が協力して取り組んでいくことが大切である。それぞれの人が。それぞれの場所で使命感をもってやっていきたい。

○　大人ががんばるすがたを見せることが大切である。また、子どもが大人を見ている。そのためには、しっかりと大人が子どもに背中を見せていきたい。

○　自分には、高齢の母がいる。あれをしたり、これをしたりしたらいけんよと言うが、あれこれしている。市議会議員をしているが、それは、家族文化を再構築したいとの思いがあって始めた。その文化を創るために大切な事をここで学ぶことができた。

○　昔は、PTA＝女性という感じがしていた。今はおやじが熱い。学生でもできることを今、がんばっていきたい。

○　おのみちで様々な活動を行っている。今夏 100 キロウォークを行った。体育館で寝泊まりをしたり、子どもたちだけで食器洗いをしたりした。子ども第一の考えで行っているのだが、子どもたちといっしょに行うことで、成長をしている。

○　今日は 300 人以上の方が集まって話合ったが、様々なテーマがあり、実りのある話し合いができたと思う。今日の会で、何かしらのお土産ができたらいいなと思うが、ここでの出会いがこれからのつながりになることもあるし、そこからさらにつながりができると思う。全ての活動が、地域とつながっている。これからも、地域のために地域を盛り上げる活動を行おう。

分散会５

司会者　　石城戸　美恵子
記録者　　橋本　圭右
会場責任者　吉田　和仁

認定 NPO 法人　ラ･ファミリエ

ラ･ファミリエでは、難病の子ども、その家族のための宿泊施設の運営、小児慢性特定疾病児童等自立支援事業を行っている。相互交流支援、就職支援、きょうだい支援、相談支援、学習支援をしている。特定疾病児童のほとんどは、通常の学校、学級に通っている。今後希望するサービスや支援として、学校等での疾患理解、経済的支援、悩みや心配事の相談等がある。学習支援は、タブレット端末等を使って、学習支援ボランティアが対象児童に遠隔での支援や、サロンでの学習支援をしている。これからの課題として、教育機関との連携が鍵になる。また、自立支援員がどこまで就学・学校のことができるかが課題である。

愛媛県立三崎高等学校

「三崎おこし」を、三崎高校せんたん部が中心となって行っている。伊方町は深刻な人口減少が問題である。伊方町活性化のため、収入 UP、吸引力 UP、情報発信力 UP の三本柱で行っている。事例として、①佐田岬ジャンボリー　②短編映画の作成　③みさこうたいそう１１５　④せんたんミーティング　を行った。①の内容は、ブイを使ってのブイアート、インスタ映え選手権である。②では、文化祭等、様々なところで上映予定である。③では、地域の様々な場で体操を一緒にするという交流を行った。今後の展望として、認知度を上げるためにイベントごとでの披露や施設訪問、テレビ放送をしていきたい。④では、地域活性化のための活動事例発表や、話し合い、ウォークラリーをしたりするなどの交流を行った。

,吉野川市川島公民館

若い世代を中心に、公民館への関心が薄れている現状から、子供講座の拡充を目標に設定。学校との連携を積極的に行った。以下事例として①山瀬小学校公民館訪問　②夏休みクッキング教室　③防災教室　④職場体験学習　を行った。①では公民館はどういうところかを台本を作りコミカルに説明。また、クイズ、読み聞かせ、ゲームなども行った。②では、県立川島高校の生徒が、児童の調理の補助を行った。絵本を紹介（紙芝居や劇等での読み聞かせ）し、そこに出てくるおいしそうな食事を作った。③は、地域の方や諸団体、講師の方に協力していただき、実際に防災食を作ったり、トイレ用のパウダーを作ったりした。ファシリテーターとともに、ホワイトボードミーティングでまとめ、共有を行った。

＜質疑応答＞

ラ・ファミリエ

Q　職員のカウンセリングが必要であると思うが、どうされているのか。

→私たちのスーパーバイザーはいない。モチベーションをどうしていくかは課題である。愛媛は比較的できているほうだと思う。徳島は進んでいない。

Q　学校での連携があまりされないが、それはなぜだと考えるか。また、疾病の児童の年齢の幅はどのくらいか。

→どのようにしたら取れるのか。病気の子の人数が少ないから取りづらいところがあるのかもしれない。保護者と学校との間に入って、要望の調整を私たちはしている。特別支援学校の児童と違って、対象の児童は目に見えにくいところがあるためなかなか対応してくれないところがある。年齢の幅は生まれる前～５５歳くらいまで。小慢は意外と身近にある。愚痴をはける場として、活動している。

Q　教育間での連携が鍵であるが、壁であるものは何か。また、主治医と学校との間に保護者が入る現状・・・難しさがあるが、その辺はどうか。

→個人情報問題。学校の先生は抱え込まずに保護者に連絡→うちに連絡をしていただくようお願いしている。昔は主治医と学校との連携があった。学校側からも、何でも相談してほしい。

愛媛県立三崎高等学校

Q　インスタ映え選手権について、実行に移すまでの苦労について。

→地域外の中学生も呼んだ。道がわからなくならないよう、ガイドを集めたが、大変だった。また、インスタの公開をどのようにするのか。

Q　地元へ残って住みたいと思う人と、都会へ行きたいと思う人がいると思うが。

→小、中、高での先生方の取り組みで、愛郷心がある。そんなブーメラン人材を増やしていきたい。また、地域おこしの活動をして、いずれは県内に帰りたいという気持ちが芽生えた。田舎は情報量が少ない。外に出て、地元のよさを見つけていきたい。

Q　企画、運営について　映画作成等の費用について。

→三崎高校の総合的な学習の時間。企画運営、開発、情報発信に分かれている。「せんたん部」は部活動ではなく団体。企画運営も担当。地域からの依頼もある。費用については人材育成費用として町がお金を出している。

Q　１１５の根拠は。

→愛大の教育学部の先生と話した。登山家の三浦氏を参考に。目標は高く持つべき。

Q　大分に負けない商品（鯖、鯵）を作って欲しい。

→漁業との関わりについては、魚の扱いは難しく、あまりできていない。しかし三崎の様々な特産品を、商品開発しているよう取り組みをしている。

Q　みさこうたいそうは誰が考えたのか。

→三崎高校生が考案。総合的な学習の時間で、グループでたいそうを作ろうと考えた。

Q　三崎高校の、様々な活動をしていく取り組みの雰囲気はどのようにできたのか。

→４年前「三崎おこし」。土曜日に生徒を代休なしで学校にこさせた。活動的なことを２時間取り入れる。最初はどうしてこんなことを・・・だったが、実績ができてくると、要望や依頼が生まれる。喜んでもらえる。メディアが取り上げてくれる。認知度が高まる。やりがいも生まれる。その積み重ねで今の雰囲気がある。温度差はあるが、年々縮まっている実感がある。

川島公民館

Q　子どもに勉強を教える、簡単な取り組み（プチ企画）を教えて欲しい。

→プラネタリウムづくり、ミサンガ編み、ペットボトル貯金箱　など。自分でできるものと、そうではないものはインターネット等調べて実践。

Q　公民館→学校への連携の仕方について。

→学校は子どもを守るためにたくさんの配慮することがある。学校の先生のことを考えて、アポ取りや提案を行う。先生方の負担にならないような配慮を考える。

Q　団体とのつながり（支援）はどうしているか。

→各団体とのコーディネーターが公民館の役割。

Q　クッキング教室はどのような枠組みで高校生と関わっているのか。

→ボランティアで来ている。だからこそ、よく見て、ほめる。せっかく来てくれた子には何か返したい。

Q　新しいことをするにあたっての情報発信の仕方（広報）はどうしているか。

→広報には苦労をした。どこにでも広報していいわけではない。回覧板での呼びかけ、HP、SNS、学校に協力依頼して配布物、プレゼン、口コミ・・・徐々に広まっていった。

Q　新しい企画の職員間での役割分担について。

→職員４名。企画運営は私。館長の人柄で様々な企画ができている。運営方法は「もっとできる」をモットーに。手間暇を惜しまない。諦めない。失敗は構わない。

＜その他質問および感想＞

○　人を大切にしている。忘れてはいけないことをおさえている。心がぽかぽかした。

○　八幡浜出身で、育った村は飛び出したが、県内に就職した。田舎は環境は悪くても努力している。がんばってほしい。

Q　責任のある立場の人が背中を押すことが大切だと感じたが。（三崎の先生、館長へ）

→地元の OB。残したいという気持ちが大きい。おもしろいと思えることを積極的にやろうという思い。

→一回だけの企画はダメ。地域の方が来てもらえやすい条件を作って努力をする。敷居の低い公民館を作ろう。

Q　三崎高校のアート作品について。

→三崎のゴミを何かにできないか。親しみのあるブイをアートに。